

## 第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いまここであらためて、歴史とは何か、という問いをたてることにする。大きすぎる問いなので、問いを限定しなくてはならない。中島敦が「文字禍」で登場人物に問わせたように、歴史とはあったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか、ともう一度問うてみよう。この問いに博士は、「書かれなかった事は、無かった事じゃ」と断定的に答える。すると博士の頭上に、歴史を刻んだ粘土板の山が崩れおちてきて命を奪ってしまうのだった。あたかも、そう断定した博士の誤りをただすかのように、こういう物語を書いた中島敦自身の答は、宙ぶりのままである。

たしかに、書かれなくても、言い伝えられ、記憶されていることがある。書かれたとしても、サンイツ<sup>a</sup>し、無に帰してしまうことがある。たとえば私が生涯に生きたことの多くは、仮に私自身が「自分史」などを試みたとしても、書かれずに終わる。そんなものは歴史の中の微粒子のような一要素にすぎないが、それがナポレオンの一生ならば、もちろんそれは歴史の一要素であるどころか、歴史そのものということになる。ナポレオンについて書かれた無数の文書があり、これからもまだ推定され、確定され、新たに書かれる事柄があるだろう。だから「書かれなかった事は、無かった事じゃ」と断定することはできない。もちろん「書かれた事は、有った事じゃ」ということもできないのだ。

さしあたって歴史は、書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことの間<sup>ア</sup>にまたがつており、画定することのできないあいまいな霧のような領域を果てしなく広げている、というしかない。歴史学が、そのようなあいまいな領域をどんなに排除しようとしても、歴史学<sup>ア</sup>の存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている。この巨大な領域のわずかな情報を与えてきたのは、長い間、神話であり、詩であり、劇であり、無数の伝承、物語、フィクションであった。

歴史の問題が「記憶」の問題として思考される、という傾向が顕著になつたのはそれほど昔のことではない。歴史とはただ遺跡や史料の集積と解読ではなく、それらを含めた記憶の行為であることに注意が向けられるようになった。史料とは、記憶されたことの記録であるから、記憶の記憶である。歴史とは個人と集団の記憶とその操作であり、記憶するという行為をみちびく主体性と主観性なしにはありえない。つまり出来事を記憶する人間の欲望、感情、身体、経験<sup>b</sup>をチヨウエツしてはありえないのだ。

歴史を、記憶の一形態とみなそうとしたのは、おそらく歴史の過大な求心力から離脱しようとする別の歴史的思考の要請であつた。歴史は、ある国、ある社会の代表的な価値観によつて中心化され、その国あるいは社会の成員の自己像(アイデンティティ)を構成するような役割をになつてきたからである。歴史とは、そのような自己像をめぐる戦い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあつた。歴史における勝者がある以前に、<sup>イ</sup>歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあつて、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ。

あるいは情報技術における記憶装置(メモリー)の役割さえも、歴史を記憶としてとらえるために一役買ったかもしれない。熱力学的な差異としての物質の記憶、遺伝子という記憶、これらの記憶形態の延長上にある記憶として人間の歴史を見つめることも、やはり歴史をめぐる抗争の間に、別の微粒子を見出し、別の運動を発見するキカイになりえたのだ。量的に歴史をはるかに上回る記憶のひろがりの中にあつて、歴史は局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎない。歴史は人間だけのものだが、<sup>ウ</sup>記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがり<sup>エ</sup>と深さをもつている。

歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている。歴史は、さまざまな形で個人の生を決定してきた。個人から集団を貫通する記憶の集積として、いま現存する言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具などのすべてを形成し、保存し、破壊し、改造し、再生し、新たに作りだしてきた数えきれない成果、そのような成果すべての集積として、歴史は私を決定する。私の身体、思考、私の感情、欲望さえも、歴史に決定されている。人間であること、この場所、この瞬間に生まれ、存在すること、あるいは死ぬことが、ことごとく歴史の限定<sup>d</sup>(シンコウ)をもつ人々はそれを神の決定とみなすことであろう)であり、歴史の効果、作用であるといえる。

にもかかわらず、そのようなすべての決定から、私は自由になろうとする。死ぬことは、歴史の決定であると同時に、自然の決定にしたがって歴史から解放されることである。いや死ぬ前にも、私は、いつでも歴史から自由であることができた。私の自由な選択や行動や抵抗がなければ、そのような自由の集積や混沌こんとんがなければ、そもそも歴史そのものが存在しえなかった。

たとえばいま、私はこの文章を書くことも書かないこともできる、という最小の自由をもっているではないか。生活苦を覚悟の上で、私は会社をやめることもやめないこともできるといふような自由をもち、自由にもとづく選択をしうる。そのような自由は、実に乏しい自由であるともいえるし、見方によっては大きな自由であるともいえる。そのような大小の自由が、歴史の中には、歴史の強制力や決定力と何らムジユンeすることなく含まれている。歴史を作ってきたのは、れいり、れいりな選択であると同時に、多くの気まぐれな、盲目の選択や偶然でもあった。

歴史は偶然であるのか、必然であるのか、そういう問いを私はたてようとしていたのではない。歴史に対して、私の自由はあるのかどうか、と問うているのだ。そう問うことにはたして意味があるのかどうか、さらに問うてみるのだ。けれども、決して私は歴史からの完全な自由を欲しているのではないし、歴史をまったく無にしたいと思っているでもない。歴史とは、無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡にはかならない。オそれらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである。

(宇野邦一『反歴史論』)

〔注〕 ○「文字禍」——中島敦（一九〇九—一九四二）の短編小説。

設問

(一) 「歴史学の存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている」(傍線部ア)とあるが、どういふことか、説明せよ。

(二) 「歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあつて、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ」(傍線部イ)とあるが、どういふことか、説明せよ。

(三) 「記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さをもっている」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている」(傍線部エ)とあるが、どういふことか、説明せよ。

(五) 筆者は「それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである」(傍線部オ)と歴史についてのべているが、どういふことか、一〇〇字以上二二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。なお採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

- a サンイツ      b チョウエツ      c キカイ      d シンコウ      e ムジュン

## 第二問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、たよりなかりける女の、清水きよみづにあながちに参るありけり。参りたる年月積りたりけれど、つゆばかりその験しるしとおぼゆることなく、いとどたよりなくなりまさりて、果ては、年来としごうありけるところをも、そのこととなくあくがれて、寄りつく所もなかりけるままには、泣く泣く観音を恨みたてまつりて、「いみじき前の世さきの報いなりといふとも、ただ少しのたより賜たまはり候まごはん」といりもみ申して、御前まへにうつぶしたりける夜の夢に、「御前より」とて、「かくあながちに申すは、いとほしくおぼしめせど、少しにても、あるべきたよりのなければ、その事をおぼしめし嘆くなり。これを賜はれ」とて、御帳みちやうの帷かたひらをいとよくうちたたみて、前に打ち置かると見て、夢さめて、御燈明みあかしの光に見れば、夢に賜はると見つる御帳の帷、ただ見つるさまにたたまれてあるを見るに、「さは、これよりほかに、賜たまふべき物なきにこそあんなれ」と思ふに、身のほど思ひ知られて、悲しくて申すやう、「これ、さらに賜はらじ。少しのたよりも候はば、錦にしきをも、御帳の帷には、縫ひてまゐらせんとこそ思ひ候ふに、この御帳ばかりを賜はりて、まかり出づべきやう候はず。返しまゐらせ候ひなん」と口説くせき申して、犬防いぬふせぎの内にさし入れて置きつ。さて、またまどろみ入りたるに、また夢に、「など、さかしうはあるぞ。ただ賜たまはん物をば賜はらで、かく返しまゐらすは、あやしき事なり」とて、また賜はると見る。さて、醒さめたるに、また同じやうに、なほ前にあれば、泣く泣く、また返しまゐらせつ。かやうにしつ、三度みたび返したてまつるに、三度ながら返し賜びて、はての度は、この度返したてまつらば、無礼むらいなるべきよしを戒められければ、「かかりとも知らざらん僧は、御帳の帷を放ちたるとや疑はんずらん」と思ふも苦しければ、まだ夜深よふかく、懐にさし入れて、まかり出でにけり。「これをば、如何いかにすべきならん」と思ひて、引き広げて見て、「着るべき衣きぬもなし。さは、これを衣にして着ん」と思ふ心つきぬ。それを衣はかまや袴はかまにして着てける後、見と見る男にまれ、女にまれ、あはれにいとほしきものに思はれて、すずろなる人

の手より物を多く得てけり。大事なる人の愁へをも、その衣を着て、知らぬやんごとなき所にも、まるりて申させければ、かならず成りけり。かやうにしつつ、人の手より物を得、よき男にも思はれて、楽しくてぞありける。さればその衣をば収めて、かならずせんと思ふ事の折りにぞ、取り出でて着てける。かならず叶ひけり。

〔古本説話集〕

〔注〕 ○清水——京都の清水寺。本尊は十一面観音。

○いりもみ申して——執拗しつようにお願ねがい申し上げて。

○御帳の帷——本尊を納めた厨子しの前に隔てとして垂らす絹製の布。

○犬防ぎ——仏堂の内陣と外陣を仕切る低い格子のついたて。

○人の愁へ——訴訟。

## 設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「かかりとも知らざらん僧」(傍線部エ)を、「かかり」の内容がわかるように現代語訳せよ。

(三) 「楽しくてぞありける」(傍線部オ)とあるが、「楽しくて」とはどのような状態のことか、簡潔に説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

周鉄厓屢試秋闈不售。一日自他処歸、夜泊船村落間。望見臨水一家、樓窗外有碧火如環。舟人見而駭曰、「縊鬼求代、多作此状。此家必有下將縊死者。慎勿声、鬼為人所覺、且移禍於人。」周奮然曰、「見人死而不救、非夫也。」登岸、叩門大呼。其家出問、告以故、大驚。蓋姑婦方勃谿、婦泣涕登樓。聞周言、亟共登樓、排闥而入。婦手持帶立牀前、神已痴矣。呼之踰時始覺、拳家共勸慰之、乃已。周次日抵家。夢一老人謂之曰、「子勇於為善、宜食其報。」周曰、「他不敢望、敢問我於科名。」

何如<sup>ト</sup>。老人笑<sup>ヒテ</sup>而示<sup>スニテ</sup>以<sup>テ</sup>掌<sup>ヲ</sup>。掌中<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>「何可成<sup>ニ</sup>」<sup>ニ</sup>三字。寤<sup>メテ</sup>而歎<sup>ジテ</sup>曰、「科名無<sup>レ</sup>望<sup>カ</sup>矣。」其明年、竟登<sup>ニ</sup>賢書<sup>ニ</sup>。是科主試者<sup>ハ</sup>為<sup>ニ</sup>何公<sup>ニ</sup>始<sup>メテ</sup>悟<sup>ニ</sup>夢語<sup>ニ</sup>之巧合<sup>也</sup>也。

(兪樾『右台仙館筆記』による)

- 〔注〕 ○秋闈——秋に各省で行われる科挙。 ○求<sup>レ</sup>代——亡魂が冥界から人間界へ戻るため、交代する者を求める。  
 ○姑婦——しゅうとめと嫁。 ○勃谿——けんか。 ○闈——小門。 ○踰時——ほどなくして。  
 ○科名——科挙に合格すること。 ○登<sup>ニ</sup>賢書——秋闈に合格する。 ○主試者——試験の総責任者。  
 ○何公——「何」という姓の人物に対する敬称。

設問

- (一) 「慎勿<sup>レ</sup>声」(傍線部 a)とあるが、なぜか、わかりやすく説明せよ。  
 (二) 「拳家共勸<sup>ニ</sup>慰<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>乃已」(傍線部 b)を、必要な言葉を補って、平易な現代語に訳せ。  
 (三) 「何可成」(傍線部 c)を、周鉄厓の最初の解釈に沿って、平仮名のみで書き下せ。  
 (四) 「始悟<sup>ニ</sup>夢語<sup>ニ</sup>之巧合<sup>也</sup>」(傍線部 d)とあるが、どういふことか、具体的に説明せよ。